

かれています。

エッティオに代表されるローマ帝国の強力な軍隊に対しても、法王レオーネに代表されるローマの聖なる世界に対してもアッティラの態度は威圧的である。アッティラと法王との会談の場面は音楽的な観点からも本当に素晴らしい。

ヴェルディのオペラの中でのアッティラは野蛮人ではなく大きな人間性を備えた王であり、征服者であり魅力あふれる人物で名誉を重んじる強い意識を持っている。同等の権力を持つエッティオには、自分の対話者として大きな尊敬の意を表している。

演奏法については「アッティラ」もテンポをはずす勇気を持つことが必要だと言いたい。リズムの明確さに関して言えば「音楽隊」のようであってはならない。

このオペラではアッティラの従者であるウルディーノのようなわき役に至るまで、すべての登場人物が大変重要な役であり、ギリシャ彫刻の様な姿を思い浮かばせる。・・・

次にオダベッラの登場の場面、オダベッラは男勝りの偉大な女性である。実際、ヴェルディのレパートリーの中でも最も難しい役の一つである。なぜならドラマティックなソプラノとして劇場の空間を鋭い刃物で切り裂くような強い歌い方が要求される場面とフルートのように柔らかい音色で歌わなければならない場面があるからだ。

「アッティラ」はまた、若きヴェルディが声の響きや音色を発見するきっかけになった作品である。例えば、空気のざわめきだとか、小川のせせらぎとか。

オダベッラの歌には独創的な楽器の使い方がされていて、イングリッシュ・ホルン、チェロ、コントラバスのソロ、ハープの旋律には対位法を用いている。

ヴェルディは音楽を通して政治的な背景を揺るがすことができることを知った。国家統一運動において最も有名な人物になったこともあって、明らかに革命的な姿勢を反映したオペラを次々書いたのである。「リッカルド・ムーティ、イタリアの心ヴェルディを語る」田口道子訳音楽之友社